

平成21年6月1日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520165

研究課題名（和文） 十八世紀イギリスにおける美学イデオロギーの研究

研究課題名（英文） A Study of Aesthetic Ideology in eighteenth-Century Britain

研究代表者

大河内 昌 (OKOCHI SHO)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：60194114

研究成果の概要：本研究は、18世紀イギリスの道徳哲学、政治経済学、小説、ロマン主義の詩や詩論といった多様な言説の中に存在する、美学のイデオロギー的性格を明らかにした。この時代の美学や倫理学の中心概念である「道徳感情」や「共感」が、当時の政治的・社会的状況が内包していた問題を想像的に解決するためのイデオロギーとして生成された過程を分析し、またそれらが文学的な言説の中にかいに取り込まれ、広まっていったかを解明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	390,000	2,590,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：美学、イデオロギー、道徳哲学、ロマン主義、感傷主義、感受性、政治経済学

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者である大河内は、本研究を開始する以前には、コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge)を中心とするイギリス・ロマン主義の詩論の研究をおこなっていた。そこで浮かび上がってきたのは、イギリス・ロマン主義の中心概念とされていた「想像力」

(imagination)の政治的・イデオロギー的な意味である。コールリッジによれば、想像力とは理性と感情、精神と自然、時間性と永遠性といった対立する要素を「統合する力」である。そこで研究代表者が注目したことは、ロマン主義の想像力理論はたんなる美学的

な概念ではなく、政治的な概念でもあるということであった。広く知られているように、コールリッジはジャーナリストでもあり、同時代の政治的な事件や出来事に対する発言をさかんにこなっていた。そうした政治的著述においても、想像力や象徴にかんする美学的な概念が多く用いられている。それらは、解決がむずかしい当時の社会的・政治的な問題の本質を理解し、それらに対する処方箋を提案する議論の重要な媒体となっていたのである。つまり、コールリッジにおいて、美学は、個別的な政治的・社会的事象や問題を理解し、またそれらに対してある種の「象徴的解決」を与えるためのイデオロギーとして作用していたことがわかってきたのである。だが、イデオロギーとしての美学という問題機制を考察する上で避けて通れない問題は、18世紀イギリス思想とロマン主義の関係であった。従来も18世紀思想・文学とロマン主義の関係を考察した研究は少なくなかった。しかし、その多くは、18世紀の機械的経験論を観念主義的なロマン主義美学が克服したといった、目的論的な歴史記述にとらわれる傾向があった。しかし、18世紀の美学や道徳哲学といった理論的・イデオロギー的言説を精読することによってわかったことは、それらの言説においても、「想像力」という概念が中心的な重要性をもっていたこと、「想像力」は美学的な概念であると同時に、政治的・イデオロギー的な概念でもあったということである。18世紀の思想・文学における美学のイデオロギー的機能を理解することは、その後のロマン主義における美学イデオロギーの問題、ひいては広く近代における美学とイデオロギーの問題を解明することにつながるのではないかと考えられたのである。本研究の当初の背景には、そうした美学イデオロギーの歴史的展開への関心があったのであ

る。

2. 研究の目的

本研究は、18世紀イギリスにおける美学イデオロギーの問題を解明しようとするものである。「感性の学」という意味での「美学」(aesthetics)という用語は、18世紀中葉のドイツの哲学者バウムガルテン (Alexander Baumgarten) に由来し、カント (Kant) の『判断力批判』 (*Kritik der Urteilskraft*) が18世紀の美学思想を集大成したとされている。だが、ドイツにおける学問分野としての美学の本格的な成立に先立つかたちで、18世紀のイギリスでは、シャフツベリー (Shaftesbury)、ハチソン (Francis Hutcheson)、ケイムズ (Kames)、バーク (Edmund Burke) といった多くの作家・文人が、「趣味」や「感受性」や「想像力」といった感性的な能力の解明に関する美学的な論考を積み重ねていったのである。イギリスにおける美学的な議論の特徴は、それが「道徳哲学」 (moral philosophy) の一部として展開したという事実である。言うまでもなく、現在の学問区分で言う「法学」、「経済学」、「政治学」、「美学」、「修辞学」、「文学批評」といった多様な分野をふくむ18世紀イギリスの道徳哲学は、当時勃興しつつあった市民社会やその経済的基盤となりつつあった商業を、どのように説明し、正当化してゆくかという課題に取り組んでいたのである。つまり、美学はカントが言うような「没利害的」 (disinterested) なものであるどころか、当時勃興しつつあった中産階級と市民社会の正当化を目指した、きわめてイデオロギー的なものであった。

重要なことは、18世紀イギリスの道徳哲学の中で、「美学」が政治・経済的な言説と文化的な言説を結びつける結節点をなしているということである。シャフツベリーもハチ

ソンも「美」を感知する「内的感覚」を、道徳的な美である「徳」を感知する能力と共通なものを見なしている。ここから18世紀イギリス思想を特徴づける「美学」と「倫理学」の不可分な繋がりが生まれる。そして、J. G. A. ポーコック(J. G. A. Pocock)らが指摘しているように、「徳」は18世紀イギリスの政治思想のキーワードである。18世紀イギリスの市民社会のイデオロギーとして「美学」の成立過程を検討することによって、「文学」や「批評」を、「経済学」、「法学」といったこの時代の諸学問との関連の中に位置づけることができるし、また、「美」や「崇高」といった美学的なカテゴリーがもっていた政治的含意を解明することができるのである。

3. 研究の方法

本研究は、具体的には、シャフツベリーにおけるイデオロギーとしての美学の成立の研究を出発点として、リチャードソンの小説における感情と法の問題、崇高美学の問題、ワーズワスに見られるロマン主義の美学の問題をあつかう。本研究の特色は、文学、批評、美学、政治経済学、法学といった枠にとらわれずに、18世紀の知的言説のジャンル横断的な「地図」を作成しようとする目論見にある。そもそも、18世紀イギリスの知的な言説は、そうしたジャンルにとらわれてはいなかった。18世紀の知的企画の研究もまた、「文学」、「経済学」、「法学」といった、18世紀以降に成立した学問的なジャンルに、時代錯誤的にとられるべきではないだろう。本研究は文学と社会理論の両方のテキストを「精読」することによって、「文学」や「批評」が内包する政治性を明るみに出し、また逆に、「道徳哲学」や「政治経済学」のテキストがもつ修辭的、文学的性格を分析することが可

能となるのである。

本研究はとくにシャフツベリー(Shaftesbury)、リチャードソン(Samuel Richardson)、ワーズワス(William Wordsworth)に焦点を当てた。

4. 研究成果

(1) 本研究は、最初にシャフツベリーを分析・検討した。イギリスにおける美学の流れの出発点に位置するシャフツベリーの主著である『人間、風習、意見、時代の諸特徴』の読解をとおして、美学の言説がその原初的な形態においてすでに内包しているイデオロギー的な課題を明確にすることをこころみた。土地財産の所有と古典的教育に基づく貴族的な価値観の代弁者であるシャフツベリーの思想が、中産階級のイデオロギーである道徳哲学の形成に大きな役割を果たしたということは、ある意味で歴史の皮肉であるが、それはシャフツベリーが世俗的な商業社会へと変貌を遂げつつあった名誉革命後のイギリス社会が内包している問題の核心を、的確にとらえていたということの意味する。シャフツベリーの思想の革新性の中核にあるのは、美と徳はともに「感覚」によって知覚される、基本的に同一の性質と見なす考え方である。美と徳を同一化することには大きなものが賭けられている。じっさい、それは倫理学を神学から解放し、商業と徳を両立可能なものとする新時代の道徳哲学への出発点となるのである。

彼の理論的企画の中心にあったのは、一見主観的・個別的であるように思われる感情(sentiment)や情動(affection)といった想像的(imaginative)な能力が、道徳的判断の妥当な根拠となることを証明することであった。そうした理論的探求を要請したのは、イギリス社会の世俗化と商業化にともなう

新しい道徳理論の必要性であった。近代的な商業社会は人間の欲望や野心といった情念を肯定する社会である。だが、欲望や野心といった私的な情念を解放する社会は、同時に徳ある社会でありえるのであろうか。また、私的な利益の追求を是認する社会は、そもそも秩序と安定を保ちえるのであろうか。シャフツベリーは、こうした問題に対して解答を与えようとしたのである。換言するなら、シャフツベリーが取り組んだ問題は、私的な情念と公共的な徳の両立可能性の問題なのである。彼の主著である『諸性格』(Characteristicks)の中に見出せるのは、道徳哲学を神学的言語から解放し、新しい市民社会に相応しい道徳理論を生み出そうとする努力である。シャフツベリーの思想の中核にあるのは、美と徳はともに感覚によって知覚される基本的に同一の性質と見なす考え方である。シャフツベリーは美德を「内面的な美」と定義し、美を愛する人間の自然な情動の上に道徳原理を基礎づけようとする。徳の問題を美の知覚に関する語彙によって記述することは、道徳を神学から切り離す決定的な契機となったのである。シャフツベリーはまた『諸性格』において、美と公共善を愛するように「内的対話」とおして情念を「訓練」する方法を提案している。そうした訓練をとおして、世俗的な市民社会に相応しい理想的市民像あるいは近代的な主体の姿が浮かび上がってくるのである。

(2) 本研究の第二の焦点は、シャフツベリーによって構築された感受性の美学が、文学とくに小説というジャンルにおいて、どのような問題をはらむかということであった。18世紀のイギリス小説と道徳哲学の関係に対しては、これまでも感心が向けられてきた。おもにスコットランドで展開された道徳哲学は、市民社会の秩序を維持するための原理

を、法的な拘束力ではなく、「趣味」や「感受性」といった個人の想像的な能力に見出す社会理論を構築しようとしたのである。同時期に勃興しつつあった小説の言説もまた、欲望や情念に突き動かされて行動する諸個人によって構成される社会のあり様を描いていた。とくに、リチャードソンやオースティンに代表される「家庭小説」というジャンルは、洗練された感受性がいかに近代の市民社会の統制原理として機能するのかという問題に取り組んだのである。感受性や礼儀作法を重視する家庭小説と道徳哲学は、イギリス社会の「女性化」という観点からしばしば議論されている。

だが、この時代においては、社会の秩序と統治の問題を事物に対する権利の発生とその権利の配分という観点から考察する市民法学の言説もまた、強力な社会理論として存在していた。小説家の中でもデフォーやフィールディングは、法を中心に社会の秩序を構想した作家と言えるだろう。J. G. A. ポーコックが指摘するように、道徳哲学と市民法学は、18世紀イギリスにおける二つの異質な社会理論として存在していたのである。道徳哲学と法学の共存と緊張関係は、公的な法権力をはっきりと排除しているように見えるリチャードソンのような家庭小説の作家のテキストの内部にも発見できる。本研究は、女性的な徳や洗練された礼儀作法が支配的な原理になっているリチャードソンの『クラリッサ』の小説世界に、法的な権力と規範が入り込み、女性的な原理に基づく道徳的規範と不協和音を立てながらも、ある種の奇妙な共犯関係を切り結ぶそのあり方を中心に、『クラリッサ』のテキストを分析した。

(3) 本研究の第三のポイントは、18世紀の想像力論とロマン主義的想像力論の共通性とちがいを明確にすることである。そのケ

ースタディーとして、ワーズワスの『序曲』(The Prelude)を取り上げた。とくに、ワーズワスの『序曲』における自然と想像力というテーマが、いかに当時のイギリスにおける都市化と商業化の問題と結びついているかを分析した。自伝的な物語詩『序曲』は、あきらかに叙事詩として構想されている。叙事詩というジャンルが伝統的に公共的な価値をあつかうものである以上、ワーズワスが『序曲』を叙事詩として書いたという事実は、個人の内面的な成長という主題が、公共的な意義をもっていることが彼が信じていたことを意味する。ワーズワスは、商業化と都市化がもたらす道徳的墮落に対する処方箋として、自然の内面化を可能にする詩的想像力の重要性を強調する。ワーズワスは、近代の商業社会は共同体や人間の日常的経験を断片化することで、人間の徳性を損なうと考える。『序曲』の核心にあるワーズワスの企画は、自然との交流によって想像力を陶冶することで、商業化と都市化によって断片化された人間の経験をふたたび統合する教育的な機能を、文学に託すということである。上述したように、ヒュームやアダム・スミスは、洗練された想像力で粗野な想像力を統治するということを企てた。詩的な想像力によって、商業がもたらす想像力の墮落を防ごうというワーズワスの企画が、18世紀の道徳哲学の系譜に属するものであることはまちがいない。ワーズワスの特徴は、想像力と感受性の洗練を、文学とくに詩と結びつけたことである。詩的言語の特権性という理念は、ロマン主義を特徴づけるものである。『序曲』と『叙情民謡集』(Lyrical Ballads)の「序文」をあわせて読解することによって、いかにロマン主義の想像力論が、18世紀の美学や道徳哲学と、商業と徳の両立可能性という課題を共有していたのか、また同時にロマン主義の想

像力論が18世紀的道徳哲学をどこで袂を分かっているのか、といったことがあきらかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 大河内昌、「商業社会における「英雄的主题」—『序曲』におけるワーズワスの記憶術」、『日本文学研究』、第85巻、pp. 43-58、(2008) (査読有り)
- ② 大河内昌、「家庭小説とゴシック小説—オースティンはラドクリフの何を恐れたのか」、『ジェイン・オースティン研究』、第2号、pp. 125-130、(2008) (査読なし)
- ③ 大河内昌、「崇高美学の楽しみ」、『日本ジョンソン協会年報』、第32号、pp. 6-9、(2008) (査読なし)
- ④ 大河内昌、「シャフツベリーにおける美学と批評」、『未分化の母体—十八世紀文学論集』、千葉豊、能口盾彦、干井洋一 編 (英宝社)、pp. 21-39、(2007) (査読有り)
- ⑤ 大河内昌、「ロマン主義研究と批評理論」、『英語青年』、第153巻第1号、pp. 2-4、(2007) (査読なし)
- ⑥ 大河内昌、「美学イデオロギー——シャフツベリーからコールリッジへ」、学位論文 (博士) 東北大学、(2007) (査読なし)
- ⑦ 大河内昌、「リチャードソンと道徳哲学」、『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第3号、pp. 23-33、(2006) (査読有り)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 大河内昌、「18世紀小説における想像力と財産」(日本オースティン協会第1回大会シンポジウム「世紀が変わる、小説が変わる」2007年6月30日、明治学院大学)

- ② 大河内昌、「ピクチャレスクの主体—18世紀の風景美学とゴシック小説の空間表象」
（日本英文学会第79回大会シンポジウム
「空間表現の英文学—「旅立ち」と「到着」
の謎(エニグマ)」2007年5月19日、慶應義塾大学)

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大河内 昌 (OKOCHI SHO)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：60194114

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし